大正十四年九月十日印刷納本
大正十四年九月十二日第一刷千五百部發行
大正十五年九月十日第二刷五百部發行
昭和二年六月十五日訂正第三刷千部發行

定價壹圓五拾錢

著者　岸田國士

刊行者　長谷川巳之吉

東京市芝區下高輪二二一

刊行所　第一書房

振替東京六四二二三
電話高輪一二九四
五六〇七

印刷者　萩原芳雄

チロルの秋

名著複刻全集 近代文学館 昭和44年9月

戯曲集

チロルの秋

岸田國士著

戯曲集

秋のルロチ

東京高輪

第一書房

千九百二十七年

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

紙風船（一幕）……七
ぶらんこ（一幕）……三七
命を弄ぶ男ふたり（一幕）……六七
軌道（默劇）……一〇三
チロルの秋（一幕）……一二四
古い玩具（一幕六場）……一五七

紙風船

（一幕）

晴れた日曜の午後——庭に面した座敷。

夫。（縁側の籐椅子に倚り、新聞を讀んでゐる）

「米國フラー建材會社のターナー支配人が一日目白文化村を訪れて、おおロスアンゼルスの縮圖よ！　と申しましたやうに、目白文化村は今日瀟洒たる美しい住宅地になりました」

妻。（縁側近く座蒲團を敷き、編物をしてゐる）なに、それは。

夫。（讀み續ける）「四萬坪の地區には、整然たる道路、衞生的な下水水道電熱供給裝置テニスコート等の設備があり多くの小綺麗なバンガローや莊重なライト式建築、さては、優雅な別莊風の日本建築などが、富士の眺めや樹木に富む高臺一帶の晴れやかな環境に包まれて……」（新聞を投げ出し）おい、散歩でもして見るか。

妻。　いいから川上さんとこへ行つてらつしやいよ。

夫。是非行かなくつてもいいんだよ。

妻。あたしは、思ひ立つた時すぐでなければやいやなの。

夫。散歩か。

妻。散歩でもなんでも……。

（間）

夫。散歩でもなんでもつたつて、ほかに何かすることがあるかい。

妻。ないから、それでいいぢやないの。

夫。あ。

妻。川上さんとこへいらつしつたらどう、そんなこと云つてないで。

夫。もう行きたくないよ。

妻。行つてらつしやいよ、ね。

夫。行かないよ、お前のそばにゐたいんだよ。わからない奴だなあ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

妻。　わかつてますよ、憚りさま。

（間）

夫。　あゝあ、これがたまの日曜か。

妻。　ほんとよ。

夫。　（また新聞を拾ひ上げ、讀むともなしに）

かういふ場合の處置なんていふことを、新聞で懸賞募集でもして見たら、面白いだらうな。

妻。　あたし出すの。

夫。　（新聞に見入りながら、興味がなささうに）何んて出す。

妻。　問題はなんて云ふの。

夫。　問題か……問題はね、結婚後一年の日曜日を如何に過すか……。

妻。　それぢや、わからないわ。

夫。　わからないことはないさ。ぢや、お前云つて見ろ。

妻。　日曜日に妻が退屈しない方法。

夫。　そして、夫も迷惑しない方法……。

妻。　いいわ。

夫。　名案があるのか。

妻。　あるの。先づ女は、朝起きたら、早速お湯に行つて、ちやんとお化粧をすまして、着物を着替へて、一寸お友達の處へ行つて來ますつて云ふの。

夫。　すると……。

妻。　すると、男は、きつといやな顔をするにきまつてるでせう。

夫。　きまつてやしないさ。

妻。　あなたのことよ。

夫。　おれが何時いやな顔をした。

妻。　しないの。

夫。　まあいい、それからどうする。

妻。　いやな顔をするでせう。さうしたら、かう云ふの——實は、あんまり行きたくもないんだけれど、うちでぶらぶらしてたつていふことが後でわかると具合が悪いから……それが、會ふたんびに、一度遊びに來い、日曜なら主人もゐるし、一緒に芝居にでもつて、さう云はれるんでせう、今日は、どうせあなたもうちにゐて下さるんだし、一寸行つて來ようと思ふの。それとも、何か御都合でもあればつて優しく聞いて見るの、それとなくよ。

夫。　それとなくね。いや、別に、おれの方はかまはないが、お前がゐなくつて、晝飯はどうする。

妻。　お晝は、お茶漬の用意をして置きました。

夫。　晩は。

妻。晩は、出がけに「あづまや」へ寄つて、親子でもさう云つて置きませう。

夫。また親子か。歸りは遲くなるだらう。

妻。さうね、まあ、はつきりわからないけれど、十時になつたら、お床を敷いて寢てて頂戴。

夫。金は持つてるかい。

妻。それがもう、すつかりなの。

夫。ぢや、これを渡しとかう。さ、十圓。

妻。ありがたう。

夫。夜風はもう寒いよ、襟卷を持つてけ。

妻。ええ。

夫。さて、おれは、これからゆつくり本でも讀まう。湯だけ沸くやうにしといてくれ。客が來たら、ビスケットの殘りがまだあると……。髭も今日は剃るまい。あゝあ、長閑

な日曜だ。

妻。（默つて下を向いてゐる）

夫。どうしたい。

妻。あなたは、もう駄目。

夫。どうして。

妻。どうしてでも。

夫。（新聞を投げだし）さうか、とれぢや、お前が若し男だつたら、さういふ時、どうする。

妻。さういふ時つて……。

夫。止めるかい。

妻。止めるわ、なんとか云つて。

夫。何んて云つて止める。

妻。是非行かなくつても濟むんなら、今日は、おれと芝居を附合はないか、とか何んと

か……

夫。なるほど。附合はうつて云はれたらどうする。

妻。行けばいいわ。

夫。行けばいいさ。しかし、行きたくなかつたらどうする。行きたくつても、事情が許さなかつたらどうする。今日見たいに。

妻。ぢや、芝居が活動になつたつていいぢやないの。

夫。活動か……あれや、お前、夫婦で見に行くもんぢやないよ。

妻。なぜ。

夫。誰にでも訊いて見ろ。

妻。それがいけないの、あなたは。あたしはほかの女と違ひますよ。

夫。違ふだらう。違ふから、なほあぶない。

妻。何を云つてるの。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo